

寺の家族と寺院継承
—母親・妻・後継者の語り—

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
桑山 聖淳

本論文の目的は、家族化した仏教寺院の世襲において、寺族の立場と後継者教育の関連性、後継ぎとなる選択に関する要因、後継者の成長要因の所在を分析することで、後継者教育の指針となる仮説を立てることである。筆者が注目したのは、世襲を行う僧侶の妻の立場の不安定さと、寺院の家族と周囲の環境がどのように後継者に影響するのかについてである。

第1章では、世襲と寺族（＝僧侶の妻）の立場についての先行研究と研究方法・調査概要を記す。寺院の家族を対象とした先行研究において、寺族は戒律・制度において曖昧な立場に置かれており、自身を守るために後継者教育を行い、結果として寺院を私有財産化している現状があることが示される。また類似した問題に牧師家庭があり、牧師夫人とその子どもは、信徒からの視線の重圧と公私の区別の曖昧さに葛藤を覚えることが示される。筆者はこれらの問題をライフストーリー分析の手法を用いて高野山真言宗3寺院の母親と後継者、その妻の語りを比較考察する。

第2章では三寺院の母親・妻・後継者の語りと考察を記す。A寺・C寺の寺族からは強い後継者教育の意識、自身の立場に不安定さを感じていること、寺院での役割と地域との関わりの限定、精神的サポートの乏しさが見られた。B寺の寺族からは後継者教育の意識の弱さ、地域との関わりの豊富さが見られた。後継者は、三者共通して個人の生活の場における地域・檀家からの視線に否定的な思いを持つが、檀務での関わりについては肯定的な思いを持つ。また僧侶としての理念や信仰は、家族以外の関わりを通して成長している。A寺・B寺は祖父母に愛着を持ち、祖父母の遺言が寺の後継者となる決心をさせている。

終章で比較考察から得られた6つの仮説を記す。①寺族は自身の立場への不安が大きい場合、後継者教育を強化する。②寺族は子どもの養育以外の役割を持つことが出来ない場合、後継者に近づき後継者教育を強化する。③<①②>を動機とする寺族の直接的な後継者教育は、後継者の主体的選択を妨げる。④後継者は地域・檀家からの一方的な関わりには否定的に感じるが、双方向の関わりには肯定的に感じる。⑤後継者の理念・信仰は地域・檀家等の周囲の人間との関わりの中で成長する。⑥祖父母が後継者に肯定的に受け止められている場合は、祖父母の関わりは後継ぎとなる意思を持たせる影響を持つ。

今後の課題として、以上の仮説は一宗派の3寺院の事例であり、一般化には更なる事例の検討が必要であることが挙げられる。